

曾祖父の筆入れ

新潟県・新潟県立新潟高等学校 1年 高橋 まりあ

「ものを大切にしてください。」この言葉、よく母から言われる。私は決してものを大切にしていない訳ではない。幼い頃から両親からお金の大切さを学んできたつもりなので、ものを買う時には細心の注意を払っている。だが、ずっと同じものを使い続けていると、気に入って買ったはずなのに、また新しいものが欲しくなる誘惑に負けてしまうことがある。例えば筆箱。高校生になるまでに5個は買い替えたと思う。あれこれ理由をつけては新しい筆箱を購入したが、使っていた筆箱が壊れたわけではない。結局捨てるにはもったいなくてそのまま机の引き出しに四つとも入っている状態だ。それでも、お店に行けば様々な機能や色、柄など、どんどん新しいものが店頭^ひに並ぶので、つつい^ひ心惹かれてしまう。

このように、今世の中はもので溢^{あふ}れている。欲しいものを探す時、あまりの選択の多さに、時に疲れてしまうこともある。物心ついた頃から、「ものを買う＝選択する」ことが当たり前と^あってきたが、その考えは少し改めた方が良く^あと思う出来事があった。

私の曾祖父の話をしたい。曾祖父は私の生まれる前に亡くなっているので会ったことはないが、よく母から話を聞いているので、一緒の時を過ごしたかのように身近に感じている。とてもものを大切に^あする人だったと聞いていた。例えば、朝使ったティッシュ1枚を何度も乾かして夜まで使っていたという話などは、戦争のない時代に生まれ育った私にとってはかなり衝撃的な内容だった。曾祖父は戦争を体験しているため、当然今よりものが少ない時代に生まれ育った。いや、ものが^あない時代を懸命に生きてきた人なのである。そのため、亡くなった時も遺品と呼ばれるものはごく僅かだったという。その中でも祖母が処分できずにいまだにと^あってあるものがあるというので、見せてもらった。どんなものかと期待していた私だったが、見せられたのはボロボロになった布切れだっ

た。生成り色でとても汚れていて、失礼ながら雑巾にも見える。それは曾祖父の筆入れだった。中には小さな先の尖った鉛筆のようなものが1個、それと新しい削られていない鉛筆が1本あった。幼い頃から勉強が好きだった曾祖父は、小さな頃からその「筆入れ」らしき布にくるんだ鉛筆を、持てなくなるまで使っていたらしい。私も鉛筆は小さくなるまで使うが、この筆入れに残っていた鉛筆は、驚くほど短かった。曾祖父はその筆入れを90歳で亡くなる時まで大切にしていたのだ。その布をよく見てみると、素材の違う小さな布で補修してある。大切にしているその筆入れに穴があくと、近くに住んでいた職人さんをお願いして補修してもらいながら使い続けていたそうだ。

「職人に頼むより買い替えた方がよっぽど安く済むのではないか」という私に、祖母は、

「お母さんがつくってくれたものだって。自分の着物の切れ端でつくってくれたものらしいよ。」と教えてくれた。

おそらく曾祖父は、今の時代のようにものがいくらでも選択できるとしても、同じようにその筆入れを大切に使い続けたと思う。曾祖父は母から筆入れをもらった時に、ものを大切にする心も一緒にもらったのではないだろうか。

だが、やはり今は時代が違う。もし、曾祖父のように多くの人々がものを大切に始めたら、消費が減り、経済が停滞するようなことはないのだろうか。そんな疑問を父にぶつけてみた。すると父は、別の産業が発展するのではないかという。多少高価なものでも長い間愛着を持って使えば、その過程で修理や交換などが必要となるだろう。そうなれば、むやみに買い替えることが減り、専門的な職人が増えるのかもしれない。曾祖父の筆入れも、修理をしていた職人がいたのだ。

今は伝統工芸を継承する人も減っていると聞く。それはとても寂しいことだ。多くのものは、機械により大量生産され、使い捨てのように壊れたら捨てるを繰り返す。当然ゴミも増え続け、このままだと取り返しのつかないことになるかもしれない。

金融政策、雇用促進、市場拡大、日本の金融問題は山積しているだろう。だからこそ、今一度立ち止まってみるべきだと思う。消費の拡大ばかり考えるのではなく、ものの価値観を見直すことも大切だと思う。例えば、急速に進んで

いるグローバル化などは、日本文化を広めるチャンスなのではないだろうか。グローバル化とは、ただ外国の文化を受け入れるだけではなく、外国の人々に日本の文化や伝統を知ってもらうきっかけをつくっているのだと思う。日本の文化や伝統を素晴らしいと感じるのは日本人だけではないからだ。最近では、伝統工芸を継承したいと弟子入りに来る外国の方もいると聞く。このように、今の時代に合った方法で日本の素晴らしい文化やものづくりをもっと広く世界に発信できたら、今の加速する消費拡大を見つめなおすきっかけになるかもしれない。想いを込めてつくられたものは、きっと相手に伝わる。だからこそ、ものを大切にしていた昔を振り返ることは、決して過去に立ち返ることではないのだ。

お金を使うということは、そのもの、「こと」に対して責任を負うことなのかもしれない。私は、ものを「もの」としか見てこなかった。

机の引き出しを開け、最初買った筆箱に目をやると、ランドセルと同じ赤く四角い大きな筆箱が寂しそうにしていた。これは、祖母が入学祝いで買ってくれた大切な筆箱だったことを思い出した。

お金を大切にする想いと、ものを大切にする想いは同じものなのだ。心の在り方は1つなのだと言祖父の筆入れが教えてくれた。少し黄ばんだ曾祖父の筆入れを開く。削られていない1本の鉛筆は、これからの未来を担う私たちへのメッセージのように思えた。

